

Title	シモンド、ツ、シスモンヂの生涯
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.3 (1910. 9) ,p.333(87)- 345(99)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100900-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

已ます。然も政府は此般の政策を以て満足するものに非ず。ロイドデヨー氏は豫算演説の一節に於て云へり。

若しも豫算にして普通の経過を爲したらんには、政府は本年度に於て失業并に疾病保険法を制定したりしならん。政府は必ず明年度に於て此種の大計畫を定め、國家より支出せる醜金を豊にし、危険なる職業に居りて失業する労働者二百五十萬人、疾病其他の不幸に陥る労働者三百萬人に保険の利益を普及するの考案なり。

政府の胸中既に斯る腹案の存するものあり、現に首相アスキス氏も過日下院に於て一議員の質問に對し、政府は本年度の議會に労働者保険に關する法案を提出するの意嚮なしと雖も、其案は既に成立し居ることを明言したり。事情斯の如くなる以上は歲計に充分の餘裕を生ずるを待ちて、之を減債基金に充つるが如き、尋常普通の手段に依て、コンソル公債時價の恢復を望むが如きは難中の難事に屬するを以て、其恢復策に就ても亦非常の手

段を唱ふる者あるに至れり。彼のコンソル公債の高利借換を行ひ、二分五厘利付の公債を回收して、新三分利付公債を以て、之に代らしめんとする所説の如き、數年前始めて之を耳にしたる際には、頗る奇矯の言なるが如くなりしが、今や必ずしも然らず。マックワリスプレード氏が近時公にしたる小冊子 (The Depreciation of Consols, and a Remedy. By Mackworth Praed.) に於ては諸種の計算を示して、此種計畫の利益あることを説明したり。

英國近時の財政状態に於て公債發行の必要緊切なるものありや否やは茲に論せず。姑く之を他日の問題に譲り、元來公債のものたる、一國財政に於て非常臨時の填補手段として、最も重要な地位を占むるは、何人も疑を挾む可からざる所なり。然らばコンソル公債の時價今日の如く、而して其低落せる價位を標準として、新公債を發行するの財政上に大なる負擔を及ぼすを顧慮し、政府に於て必要の際に、公債の發行を躊躇し、之を避くる

の結果、他の不利なる手段に依頼せざる可からざるが如き境に陥るが如きことありとすれば果して如何。國家自ら財政上の利器を放擲し、否之を擁しながら、其利用を敢てする能はざらしむるの譏を免かる可からず。コンソル公債高利借換説の如き、財政の常道より考ふるときは、頗る變則異例を以て目す可しと雖も、然も此變則異例の説が最も常識を重んじ、正道を喜ぶ英國に於て唱出せらるゝに至ては、其間自ら情狀の參酌するに足るものあるを見る可きなり。(七月九日記)

シモンド、ツ、シズモンヂ

の生涯

高橋誠一郎

(一)

『爲すに委せよ、過ぐるに委せよ、赴くに委せよ、世界は自ら動くなり』との主張に基いた個人主義の經濟學説が一代を風靡して、久しく財力及び能力の自由の發動を沮止し來つた舊時代の煩雜な干

渉制度は茲に崩壊して、各個人は皆自己及び自己の所有物に對して絶對無限の君主たるの權利を有し、智あるもの、力あるもの、富あるもの孰れも皆新制度を謳歌しつゝあるの時、シズモンヂの所謂『貴い人類同胞の友』は獨り新經濟組織、就中自由競争の反面に潜む黒い影を捕捉せんことを努めた。ゼニエーヴの人ジュアン、シャール、レオナル、シモンド、ツ、シズモンヂは正に其一人である。

彼は當時の經濟學説が専ら貨財増殖の方法を講究するに急にして、然も一般社會の幸福を増進す可き該貨財の使用方法を忽諸に附するを遺憾なりと爲し、斯る學説に基礎を有する新社會制度は富に富める者をして彌が上にも富ましむるのみならず、貧なる者をして更に愈よ貧窮ならしめ、益々經濟上社會上從屬的地位に立つに至らしむるものであると確信した。彼は單に國家を以て安寧秩序の維持を委託せられたる一權力とのみ觀ずして、近世に於ける社會上並に科學上の進歩より生

じたる福利便益を可及的社會の各階級に普及享得せしむるの一大使命を有するものと看做した。是れ蓋し後世の經濟學者が彼を呼ぶに『講壇社會主義者の先驅』を以てする所以である。

凡そ一學者の唱道した學說を研究せんとする者は須く先づ彼を産んだ社會、彼を圍遶した時代の空氣、並に彼の生涯を支配した運命を知悉することを必要とする。學說は決して其時代、其社會及び之を唱へた個人の一身から獨立沒交渉なる存在を見るものでない。吾人は斯る見地よりして以下暫くシモンド、ヅ、シスモンデの數奇なる生涯を説かんとするものである。

(二)

ジエアン、シャール、レオナルド、シモンド、ヅ、シスモンデは西紀一千七百七十三年五月九日を以てジエニヴに生れた。其祖先に遡れば彼は伊太利の名高いシスモンデ家の流である。古の榮華は儚なき夢と消えて、一千五百二十四年其郷土が全く獨立を失つた時フレデリコ、ブツオロの軍

隊と共にピザのシスモンデ家の一族は孰れも佛蘭西に亡命の客と爲つた。彼等はドーヒエを以て其定住の地と定めた。長年月に亘る流寓は何時とはなしに其本來の家名を殆ど忘れしめて、シスモンデの長き姓氏は佛蘭西流の發音に縮められシモンドと呼び慣らさるゝに至つた。彼等は臆て此地に於て新たなる宗教上の福音に動されて新教を信奉することとなつたが、此一事は再び彼等の上に累と爲つて、宛もナント勅令撤廢の當時に復も漂浪の已むなきに至つた。彼等は避難所を求めてジエニヴの市にと赴いた。十六世紀の交、宗教上の迫害に堪え得ずして佛蘭西より亡命した人々は此市に憲法を興へ、其大を致さしめ、迫害の爲めに泣ける全歐の哀れなる人民に對して絶好の避難所となしたのである。シスモンデの一族も此避難所に收容せられ、一般の尊敬を受けて相變らずシモンドを姓としてシャールの曾祖父、祖父並に父は孰れも此地に定住して居つた。然るに其後彼の父はシスモンデとシモンドの兩姓の類似せることと

並に同じくシスモンデ家の支流なることを永く傳えんとの考よりしてピザに於けるシスモンデ家の古名を恢復して、茲にシモンド、ヅ、シスモンデと名乗り、以て新たなる區別とはなした。

ジエアン、シャール、レオナルド、シモンド、ヅ、シスモンデは幼年時代を其家族の所有して居つたジエニヴの市外れなるシャーツンと呼ぶ樂しい田舎家に送つた。アージュ河の波立つた水は今や恰も湖水から流出した玉の如くに清く澄んだローンの河水と此處に混流して、激せる水面は滑かた爲り、鋭き水流は緩和せられて深碧の色を湛えてゐる。アルプス山脈の崇巖なる累峰や、ジュラ連山の笑を含んだ懸崖峭壁に對し、此等の連山群峰に圍遶せられた雄大莊麗なる湖畔の窪地の中央に立つて若いシスモンデは早くより多少なる嘆美の念と仰望の眼を以て此大自然の展開した一大畫圖を眺めてゐた。

然しながら彼は單に山水の美に酔ふて天然の偉力を頌するのみを以て能事終れりと爲す底の少年

ではなかつた。吾人は先づ彼が早くよりして政治科學に對して非常なる趣味を有して居つたことを發見せざるを得ない。彼の初めて生を享けたジエニヴは之より凡そ六十年の昔にジエアン、ジャック、ルーソーを産んだ土地である。而して彼が初めて呼吸した社會の空氣は革命の氣に充ち満ちて居つた。革命思想の偉人を産んだ土地革命の時代は彼をして先づ革命の子たらしめたのである。斯くて彼が漸く十歳に達した頃、小供に有り勝ちな人真似の天性は彼を驅つて驚く可き對象物の上に模倣を試ましめた。彼は其幼い友人等と共に彼等が理想の小共和政府を建設するを以て最も樂しき遊びとして居つた。彼等小共和黨の間には彼のベシジャン、コンスタンの弟も居つた。斯くの如きは實に一千七百八十三年のことである。而して兒童等が無邪氣なる嬉戲遊樂は既に此時に於て將來彼等が長じて大人と爲り、更に人の親と爲つた後の事業を示してゐる。彼等は自らルーソーの紀念碑を建立した一小樹林を集會の場と定めた。小共

和黨は建國のこと萬事其緒に著くや、先づ彼等の共和國に在つては萬民悉く皆方正有徳にして且つ幸福なる可きことを宣言した。シスモンデは儀式を俟たずして直ちに該共和国のソロンたることを命せられた。而して彼は滔々十四頁に亘る論文の後に、以上の如き宣言を起草したのである。

(三)

此十歳の立法者は自己の共和国の爲めに一憲法を制定した後、初めて學校生活に入ることとなつた。從來双親の膝下に在つて親しく其教育を受けつゝあつた彼は正則の學窓に羅典希臘の兩語を學ぶの必要に驅られて、ジュネーヴに於て、講筵に列することとなつた。學校に於ける彼は其方正なることに於て、忠直なることに於て、苟も不善の爲めに時を費さざることに於て、將た又其著しく順良なることに於て儕輩の間に卓絶して居つた。彼は學校の正課の外に別に私の師を選んで音樂及び繪畫を學んだ。彼は決して藝術の天才でもなく、又別段斯道に大なる趣味を有して居つた譯ではな

いが、然しながら總て他の學課に於けると等しく致々として此等の道をも勵んだのである。彼が學生時代に屢々賞與を贏ち得た希臘語は其後彼に取つては殆ど何の用をも爲さなかつた、而して彼が歴史上の述作に心血を注いで、其研究の爲めに幾多の異つた國語を理解するの必要に迫らるゝに至つた時代には彼は殆ど全く之が研究を廢して居つた。

彼は規定の學業を履修したる後、リオン市第一流のジュネーヴ人の商會たるエグナード家に商業見習の爲めにとて送られた。シスモンデの父は原と多少の資産を所有して居つたが、等しくジュネーヴ出身のジャック、ネッカーの財政計畫を信ずるの餘り、殆ど其全部を擧げて佛蘭西公債に投資したが爲めに、終に悉く之を蕩盡せんとするに至つた。彼が斯く財産上に蒙つた損害は其子をして實業に従事せしめんとすの決意を爲さしむるの因とは爲つたのである。元より商賣の道は其好む所ではなかつたが、富を得んとするの痛切なる衝動は

終に彼を動かして此致富の捷徑を選ばしめたのである。洵に富を愛し之れを尊重するの念は當時のジュネーヴに於ては今日の世界各國に於けると殆ど等しき程度まで發達して居つたのである。若いシスモンデは素直に父の意志に従つた。彼は臆て順良なる好手代とは爲つた、而して此時代に經驗し盡した商企業の知識は彼をして將來有力なる經濟學者たらしむるの素因と爲つたのである。大なる天才を有する者に取つては一物と雖も徒爲にして終るものはない。往々彼の意志に反したてとまでが却つて其大を致さしむる所以とは爲るのである。彼等の心意や思想は如何なる場所に在つても必ず完全な發達を遂げるものである。而して又大なる使命を抱いて生を此世に享けた彼等天才は永く誤つた地位境遇に其身を置くものではない。新たなる時運の變轉は必ず新たなる好機を彼等の爲めに生じて神召の力と相合して再び彼等をして眞の行路に入らしむるものである。斯くの如き事實は果してシスモンデの一身上に生じ來つた

のである。彼は其勝れた才能を壓えて之を有爲なる計算家、卓絶した帳簿方たらしむるが爲めに用ゐなかつた。然しながら長じて後彼は幾度か深い思索を以て下層社會の利害を估料し、勞働の結果を計量し、勞銀を比較し、資本及び收入の錯雜した諸問題に解決を與へ、諸國民間に於ける交易の計算を行ふの必要に達着した、従つて彼は初め嫌忌した此等の技術の助力に依るの必要を認め、這般の研究に際して其精力の大なることを祝福せざるを得なかつた。彼は間もなく一家の主人と爲つたのであるが、彼と金錢上の取引を行つた者は孰れも皆藝術家や文豪には類例のない程、其頭腦は精密正確であつて、時間の觀念正しく、且つ秩序を重んずるの念深きを賞せざるものはなかつた、是れ實にシスモンデが其青年時代に於ける誠實なる努力の結果である。而してリオン市に起つた革命の騷擾は一千七百九十二年以降再び彼をしてジュネーヴの人たらしめた。然る革命の猛火はこの山翠に水碧き湖畔の仙境をも燒いて、共和國は一

般に佛蘭西流の思想の爲めに捕へらるゝことゝ爲つた。民黨の勃興は當時政府を指導するの地位に在つた貴族的家族を倒すに至つた。シスモンヂの父も亦捕えられて獄舎に呻吟する身とはなつた。而して彼とても亦免るゝとは出来なかつた。僅かに残つた資財は獻納の名の下に没收せられ、其家に附いた少しく金目の物は悉く剝奪せられた、而して彼等が漸く獄屋を出で、自由の身と爲つた時、彼等は更に新たなる移住を志すに至つた。革命は宛もこの幸薄き一家を逐ふて避難所より避難所にと轉々せしむるの觀がある。曾て伊太利を亡命して佛蘭西に來り、佛蘭西を遁れて瑞西に去つた一家は今や又瑞西を離れて遠く英吉利の天地に身を潜めんとするのである。

一千七百九十三年の二月シモンドの一家は英國に避難所を求めてセックス州ベリアマツシなる小寺區の監督牧師と共に乗船した。彼等は儚ない一歳の夏を此牧師の居所に暮したが、肅殺たる秋風が此淋しい僻地を訪れた時、樂しき社會生活に

慣れた彼等一家は憂愁の念に堪え兼ねてケント州テンダアデンに冬を過す爲めにと赴いた。

此流浪の期間も彼シヤールに取つては決して無用に空費せられなかつた。彼は閑暇を利用して英國語の研究に耽つた。然も語學や文學の研究のみでは未だ以て此精力の横溢した少年を充分に満足せしむることが出来なかつた。彼は此國の憲法、法律並に慣習の上に思を回らした。彼は陪審裁判並に種々なる裁判上の慣例に親炙し、其他目に略、耳に聞くもの、悉く皆充分なる注意を以て之に對した。又倫敦に於ける小時日の滞在は當時第一流の俳優の演技を觀、戯曲文學の現狀を知るの機會を得せしめた。彼は又監獄、公設の諸建築物及び有名なる諸般の機關を歴訪した。斯くあらゆる機會を利用して出來得る限りの利益を收むるに急であつた此旅行は遺憾ながら母の健康兎角勝れざるが爲めに之を短縮するの已むなきに至つた。

要するに此大國に於ける流寓は彼に其國語、文學、文物制度、工業、農業並に風俗習慣に接觸す

るの好機を與へたのである。斯くて吾人が彼の著書の隨處に發見するが如き公平無私なる觀察者の態度並に世界的の感情を發達せしむるに與つて大なる力があつたのである。然も彼は滯英十八ヶ月の後、再び其の漂浪を續くることゝ爲つた。彼が終世愛情を變えなかつた其母は極めて意志の強い婦人ではあつたが又頗る憂鬱な多感な氣質を有して居つた。彼女の確固たる意志も宗教上の訓練も遂に逆旅の悲しさを打消すに足らなかつた。更に此上長く英國に流寓の生活を續けることは彼女には到底忍び得なかつた。彼女は故郷の湖水の面、山脈の姿を再び眺めつゝ郷土の方言を耳にして、假令曾つて其一族を逐ふた様な危険に再び遭遇するの虞れありとも昔ながらの家居の軒端に今一度己が姿を見んとして憧憬れた。之が爲めに一家は更にジェニローフに向つて出發し、夢にも忘るゝことの出来なかつた懐しいシャーツランに再び居を構へることゝなつた。

(四)

然も歸來幾千ならずして又々恐しい椿事が一家の上にとつた。曩に民黨の爲めに追放せられた不幸なる前市政官の一人にカイラと呼ぶ者があつた。彼はシスモンヂの一族と深い關係が有つたので窺に來つて同家に身を寄せて居つた。彼が匿はれて居つたのは庭の窪地に建てられた一構の寮で聊かでも危険の氣配があると共に佛蘭西の隣境に逃れることの出來る様になつてゐた。見張番の役を務めて終夜彼の身の上を見守つて居つた若いシスモンヂは朝の二時と覺しき頃、馬の足並と人の囁く聲音を耳にした。彼は遽に寮に引歸した。寮の門口は堅く鎖されてゐる。彼は初め靜に門口を叩いたが答へがない、再三再四呼ばはつたが矢張徒勞であつた。憐む可き老市政官は耳を聳してゐる上に生憎くと深い睡に落ちてゐた。老人の未だ答へざるに早くも憲兵は此所に來つた。呼べども答へず、推せども開かざるに困じ果てた小シスモンヂは殊勝げにも其家族の知己、一家の賓客を援護せんが爲めに戦はんと試みた。シスモンヂが一

縷の望みは此門口の混亂と喧噪がカイラの眠を破ぶつて間一髪の危機の裡に尙ほ逃亡の機會を與へんとするにあつたのである。彼は力敵せずして馬上銃の臺尻もて打ち倒された。門口を破ぶつて憲兵は寮の内に侵入した、不幸なるカイラは唯だ敵の手中に落ちんが爲めに睡りより覺めたのである。シスモンデは地上に倒れ伏しながら尙ほ胸を波打たせつゝ、窺にカイラが佛蘭西に向つて逃るる物音を聽かんとして兩の耳を聳てゐた。之より先き己が愛兒の無殘に撲ち倒さるゝのを見たシスモンデ夫人の絹を裂く様な叫聲は流石に老カイラの深い睡を破つて彼は夢より覺めたのである、而して彼が椿事の出來を知つた時は尙ほ僅に逃走の餘裕を存して居つたのであるが、老勇士は此情厚い主人の一家に累を及ぼしてまでも一命を己が免れんとするを潔しとしなかつた。彼は從容として敵の手に身を委ねたのである。尙ほ萬一の希望に縋つて恐るゝ耳を傾けつゝあつたシャールは漸くにして其持ち兼ねた戸の開く物音を聽いたので

あるが、然しそれはカイラを佛國に逃れしむるものではなかつた。彼は臆て其畏敬しつゝある老知己が憲兵に拉せられて遅々として死の途を歩み來るのを見た。此場に馳せつけた母のシスモンデ夫人は斷腸の思で悲しい告別の辭を彼に送つた。彼女は首垂れた老人の後影を見送つたまゝ、機械的に膝を地に落して長く長く無我の祈禱に耽つたのである。恐しい一夜が漸く將に明け離れんとする時、尙ほ祈禱に餘念なき家族の者の耳に遠く銃聲が響いた。四人の有徳なる市政官の生命と苦痛とを同時に絶つ可き筒音である。人の力にも神の力にも彼等は最早懸く可き一の希望さへなくなつたのである。

此不幸なる出來事は又もシスモンデ一家をしてジエニエを去らしむるに至つた。彼等は多大の遺憾を忍んで其住み慣れたシャールツランを賣り拂つた。蓋し彼等は永久に此地を去らんとして、兎角に後髪引かれ勝ちなる故園の舊宅を人手に渡し

スカニー指して出發した。彼等は此地に其詩的悲哀の情を籠めて彼等が爲めの『失樂園』と呼んだ舊宅の對價を以て一部の畑地を買ひ求め、靜に浮世の喧囂を避けて、悠々たる閑生涯を送らんと企てた。シスモンデは斯る畑地を覓むるの命を受けて、膝の栗毛に鞭を當てアペニス山脈の彎曲から成り立つた楽しい谿谷を横切ぎつた。

ルツカとピストイアとフロレンスとの中間に位するヴル、ジ、ニエールのペスチカの肥沃地は先づ其耕作の美麗と多様なるとに彼の注意を惹いた。驚く可く精妙なる技術を以て灌漑せられた緑色の平野は孰れも殆ど同じ大いさの耕地に分劃せられて或は色鮮かな麥穂の波に蓋はれ、或は牧草地、花園、果樹林として耕作せられ、境の畔には、白楊が葡萄の枝と編み合つて植ゑられてゐる。其小丘は幾層の段々に刻まれて木や草の壁に守られた土地は其斜面の形勢に従つてそれ〴〵氣の延び〴〵する様な葡萄の細徑や、青白い橄欖林、さては橙、佛手柑の並木で飾られてゐる。その

みならず果ては山々の頂までが栗の樹林に圍まれて其間にはチラホラと村落が點在してゐる。彼は此美景に打たれて暫く佇立した。彼は此秀麗なる地を選んで己が一家の衣食すべき生活の本據地たらしむに躊躇しなかつた。彼はヴル、チュエザと呼ぶ一小谿に風光絶佳なる地位を占めた田舎屋を見出した。小山の南の半腹にある建物で、ペスチアの平地を一目に見晴すことが出来る。町の高塔や城樓は向ひの小丘の深緑を面白く色彩つてゐる。此心地良き居住地に家庭の者と共に移住したシスモンデは日々楽しい耕作の監督と深い學術上の研究に耽つて時の過ぐるを知らなかつた。

(五)

然しながら此桃源の如き小谿に於ける半農半學究の生活も彼に取つて全然平和なるものではなかつた。タスカニーは交互に奧太利人の支配から佛蘭西人の手にと移されて其統治者を轉々してゐた。シャールは奥人の爲めに疑はれて他のペスチアの住民十六名と共に逮捕せられて獄裡の人と爲

り、此所に一千七百九十六年の夏を越した。彼の如く深く田園の趣味を感じ、農夫野人と伍して其勞働を分つと共に、又等しく祝祭日の遊宴に加つて心長閑に生活しつゝあつた者に取つては獄裡の監禁は實に苦い經驗であつた。彼は貴族的の傾向も終に親む可き美質を減ずるに至らなかつた其母と手を携へて幾度かバツチワラや葡萄收穫の感謝祭に臨んだ。彼は今や獨り獄舎の裡に在つて彼等下層人民の行樂の上に思を馳せた、而して彼は其後這般の農民生活を力強き筆に描いて江湖に示した、彼は當時に於ける幾多の經濟學者中に在つて獨り『人は單に麵麩のみにて活くるものにあらざること』を幾度か繰返して最後まで彼等人民の利益を主張し、彼等の爲めに辯疏の勞を取つた人である。

彼の姉妹なるホオルチ夫人の平屋根からシスモンチの家族は獄舎を見ることが出来た。纏て母子とは信號で物語りをする様になつた。若い囚人の唄ふ歌は其家族の者の耳に達した。更にこれよ

りも稍や明亮なる音信の便りはシャールに食事を運ぶを以て務めとして居つた獄卒ギアン、アントニオ、スピチオニーを通じて開かれた。囚人は常に其囚人が筆墨紙を使用することを禁じた。之が爲めにシスモンチは絶えず肉體と共に其精神をも飢死せしむるものであると啣んで居つた。然るに紙片や鉛筆の切屑は今や彼の情に由つて燭臺、麵麩、肉類果ては葡萄酒の瓶中にも潜ませられて、獄舎に入り込んだ、斯くてシスモンチ夫人の書簡が無事に此若い囚人の手に着した時、彼は之れに對する返書を認めることが出来た。感じ易い母の心は斷えず獄舎よりの通信に由つて之れを慰安し鼓舞することが必要であつた。而して彼が終世變らなかつた母思ひの眞情は善く這般の消息文中に流露してゐる。シスモンチは幾度か繰返した『吾を愛し給へ。御心を痛ましめ給ふな。吾は御身と物語り、御身の文を讀む毎に己が獄裡の人たることを忘るゝなり』云々と。

丁度酷暑の頃で、さなくも空氣の流通の惡い、

狭矮な獄舎の戸窓が夜に入つて鎖された時の炎熱は宛も釜中に煮らるゝの思ひであつた。然るに彼の獄卒の厚意と美質とが發露した純朴な表章は計らずシャールの幽居を慰めたのである。毎晩氷塊がシスモンチの母より送られたものとして獄舎に差入れられた。彼は暫くの間之を母の情と思つてゐたが、纏てアントニオが例の通り此若い囚人の幽囚の苦痛を軽減せんとして自ら行つた温情掬す可き欺計であることが判明した。之を知つた囚人は嬉しい人の情を感謝し、其母は事の意外に喫驚した。朴直純良なる彼は其日々竊に使用する書信が決して彼の寛大な處置に背くが如き危険なる性質のものでないことを確く信じて毫も疑念を抱かなかつたのである。

彼は再度奥國政府の不審を蒙つた。ジスモンチは復も平和な勞働の手を止めて幽閉の身と爲るの已むなきに至つた。彼が新たに禁錮せられたのはペステアの寺院で、先きの獄舎に比して空氣の流通も良ければ筆を執ることも亦束縛せられてお

なかつた。加之彼は寺僧の書庫をも探ることを許されて居た。事情正に斯くの如くであつたが故に、若し其母の健康にして憂懼す可きものがなかつたならば今回の禁錮は彼に取つて格別の苦痛を感じしめなかつたであらう。然しながら審問も搜索も一として彼の有罪を確む可きものがなかつたに拘らず、尙ほ其豫想せられた釋放は日を重ね月を越して長引いた。母は病牀に兒の放免を待ち慄れて彌が上にも健康を害しつゝあるのである。シスモンチは快活な平和な問談の筆を馳せて出来得る限り母の憂愁を慰めんと努めてゐた。

『御身は其英語もて物し給へる一葉の書簡の物語を知し召し給はざる可し。彼等は吾が筆と墨とを取去りたる時これを見發して先づ監督の元に持ち行き次ぎて之を副牧師に致せり。彼等は孰れも此書簡を説明することを得可き博識なる語學者を見出さんとして頗る努めたり。終に一名の僧侶は之を讀まんとして進み出でたるが、然も彼は稍や暫く辭典と首つ引きをなしたるに拘らず、何等得

る所なかりき。此神秘なる書に就きて毫も了解する所なかりし彼は、終に『愚僧は婦人の書きたるものを釋かんに餘りに持戒堅固に過ぎたり』と呟きて引き退き候。到底其能力を以ては解すること能はざるを知りたる彼等は聽てこれをピストイアに送れり。賢明なる翻譯者先生等は殊更に英語もて記されたる此手書が單に小生の午餐や晚餐のこのみを云々せるに止れる所以を了解すること能はず、更に隠れたる意味を發見せんとして苦み候。蓋し彼等は餘り多くの意義を知らんと欲するが故に却つて何事も知ることを能はざりし次第に候。』とは即ち彼が母に與へた手簡の一節である。

シスモンデは又暴虐なる專制政府の政略を指摘して母の心胸に先入主と爲つてゐる貴族的の謬見や偏執を打破せんと試みた。彼の母は彼女を懐しい故郷から追放したものは新思想の侵入であつたことを忘るゝことが出来なかつた。共和政府の一兵士は彼女の眼前に於て將に其愛兒を撲殺せんとした。彼女の賓客たり友人なる紳士を殆ど其身邊

に於て銃殺したるものも等しく自由の美しい名であつた。彼女の多感な心は夢寐にも這般の印象から離れることが出来なかつた。一般の主義原則を其實際の結果から引き離して之が理否善惡を婦人に教ゆることは決して容易の業ではない。彼は幾度か獄裡よりして其母に與へて『自由の邦國を除きては名譽も、正義も、徳義も將た又幸福もあらざる可く、而して革命の反動は革命其物に比して百倍も凶惡なるものたることを確信し給ふにあらざれば御身が胸中の苦悶は彌やが上に増大す可き』所以を説き『吾は人の行爲は之を忘れて、唯だ黨派其物を憎むなり』と稱して『御身が若し一個人に對して育ひ來りたる憎惡の念を新に一黨派の上に移して冷かに考へ給はんには御身の苦惱はさまで甚しからざる可し』と訓へた。

彼は無實の罪過に幽囚の身と爲りながらも尙ほ冷靜の判斷を失はなかつた。飽くまでも公平なる傍觀者の態度を以て時相を觀察することを忘れたかつた。シスモンデの一身を苦めたものは奧太利て國王及び其廷臣等の爲めに謳歌するが如きことは損か小生の念頭に浮ばざる所にこれ有り候』彼の胸中は常に朗々として澄み渡つて居つた。

(未完)

日本の殖民地統治問題

(其二)

小倉 和 市

『小生は佛人にあらず、又彼等の行動、彼等の政府にも謳歌するものにてはこれ無く候。然れども小生は自由なくしては眞の名譽、正義、徳操及び幸福としては全くこれ無く、反動的革命は之に先き立てる本來の革命に比して遙に呪ふ可きものなりとの意見を従前よりも更に一層確く抱持するに至り申し候。小生は共和主義を奉ずるものにてはなく候へ共、自ら稱して貴族黨となし、ペスチアの下級貴族と同一視せらるゝことは最も潔しとせざる所に候。』

『小生は茲に政治論に就きて多言を費さざる可し。自由に關する小生の意見は依然として厘毫の變化を見ず候。かの佛人に關しても亦、彼等が斯く小生を苦めたればとて之を憎惡し、其反動とし

次に予は特に臺灣及び日本の臺灣に於ける施政に關して各方面に起れる批難に付きて論述す可し曰く日本が臺灣に於て採用したる統治方法は殘忍にして且つ無秩序なり。曰く日本たるもの今や其臺灣に於ける施政方針を確立す可きの時なり。曰く若し日本今日迄の施政は日本が殖民地の行政上全力を竭したるものなりとせば日本が殖民的企圖は全然失敗なりと斷言することを得と。固より海外領地建設の場合に於て最も先に來る可きものは統治組織上の問題なるは明らかなり。然かも此問題は結極批評家が到底詳細に窮知することを得ざ